

## シュレッダーダストの引取り・再資源化の体制整備について

自動車リサイクル法においては、自動車メーカー等にシュレッダーダスト(ASR)を破砕業者から引き取って、再資源化すべき量に関する基準(リサイクル率)に従って再資源化する義務が課せられている。

上記のASRのリサイクル率及び再資源化の技術・施設の考え方については、本審議会の下に設置された特定再資源化等物品関係検討タスクフォース/小委員会(平成14年10月22日から平成15年4月18日までの間に都合6回開催)において検討が進められ、以下のような結論を得ているところ。

### [ASRのリサイクル率]

	ASRのリサイクル率
2005年度以降	30%以上
2010年度以降	50%以上
2015年度以降	70%以上

参考：ASRのリサイクル率 =

$$\frac{\left( \begin{array}{l} \text{ASR投入施設活用率を満たす} \_\_\_ \text{当該施設から排出} \\ \text{施設への投入ASR重量} \quad \text{される残さ重量} \end{array} \right)}{\text{自動車製造業者等が引き取ったASR重量}} + \frac{\left( \begin{array}{l} \text{31条認定を前提に電炉等投入し} \_\_\_ \text{電炉等から排出} \\ \text{た廃車ガラ中のASR相当重量} \quad \text{される残さ重量} \end{array} \right)}{\text{31条認定を前提に電炉等投入した} \\ \text{廃車ガラ中のASR相当重量}} \\ \text{(いずれも年度毎まとめたの重量)}$$

### [ASRの再資源化の技術・施設の類型]

		技術・施設の説明
分類1	燃料代替 + 原料化	非鉄金属精錬等の素材産業の既存設備を活用し、ASR中の可燃成分を燃料に代替することに加え、銅をはじめとする金属等を回収する技術。
分類2	乾留ガス化 + 熱回収 + 原料化	ASRを乾留ガス化して、連続する二次燃焼炉・ボイラーで熱回収・発電を行う技術。乾留残さについては、溶融化して金属資源やスラグを回収する技術。
分類3	乾留ガス化 + ガス利用 + 原料化	ASRを乾留ガス化して、発生する燃料ガスを改質・精製後そのまま利用する技術。乾留残さについては、工業カーボン材料等に利用するか溶融化して金属資源やスラグを回収する技術。
分類4	焼却処理 + 熱回収 + 原料化	焼却処理を行って連続するボイラーによって蒸気や電力の形で熱回収を行うとともに、その焼却灰等を灰溶融炉で処理して金属資源やスラグを回収する技術。
分類5	素材選別 + 燃料代替	種々の選別工程を経て、特定の単一素材を回収・再利用する技術。

さらに、ASRの引取り・再資源化の具体的な体制については、前回(平成16年3月17日開催)の本審議会において(社)日本自動車工業会より以下のような趣旨について報告がなされたところ。

自動車メーカー等はART:Automobile shredder residue Recycling promotion Team( 1)とTHチーム( 2)の2つのチームを構成してASRの引取り・再資源化を実施すること。自動車メーカー等が破砕業者からASRを引き取る指定引取場所をASR再資源化施設等そのものとし、これを各チームが破砕業者ごとに指定すること。

- ( 1)ART:いすゞ自動車(株)、スズキ(株)、ダイムラー・クライスラー日本(株)  
日産自動車(株)、日産ディーゼル工業(株)、ピー・エー・ジーインポート(株)  
フォード・ジャパン・リミテッド、富士重工業(株)、マツダ(株)、三菱自動車工業(株)  
三菱ふそうトラック・バス(株)
- ( 2)THチーム:ダイハツ工業(株)、トヨタ自動車(株)、日野自動車(株)、本田技研工業(株)  
アウディジャパン(株)、ピー・エム・ダブリュー(株)、プジョー・ジャポン(株)、  
フォルクスワーゲングループジャパン(株)

各チームが指定引取場所として指定する具体的なASR再資源化施設については、確定次第順次公表されることとなるが、選定状況等について各チームからヒアリングを行ったところ、概ね以下の通り。

#### ASR再資源化施設の選定状況

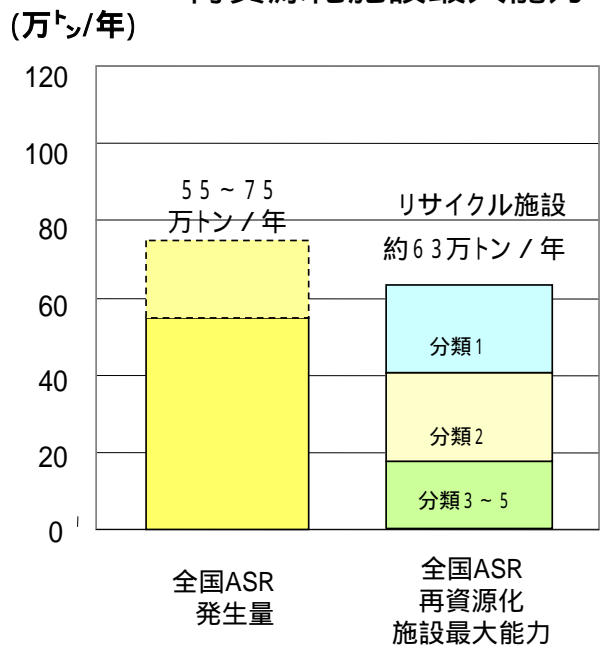
現在、ASRのリサイクル率を遵守しつつASRの適切な再資源化を進め、さらにリサイクル料金を預託する自動車所有者の負担を低減するため可能な限り低コストでの再資源化を実現すべく、ASR再資源化施設の選定を進めているところ。

#### 2005年における各チームのASRの再資源化量

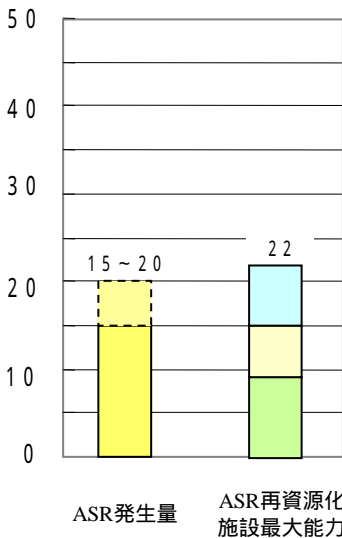
現在、各チームが各ASR再資源化施設にどの程度の量をどの程度の価格で投入するかについて、チーム間での競争領域であることを踏まえつつ検討中。しかしながら、各チームがそれぞれASRの投入を検討しているASR再資源化施設の候補については概ね明確になってきているところ。当然のことながら、ASR再資源化施設の中には、両チームがASRを投入しようと検討を進めているものと、どちらかのチームのみがASRを投入しようと検討を進めているものの双方が存在。こうしたことを踏まえつつ、両チームがASR再資源化施設の候補として検討を進めているものに関して2005年における最大のASRの再資源化能力を勘案すると概ね別添のとおりと想定される。

# 地域別ASR発生量と再資源化能力

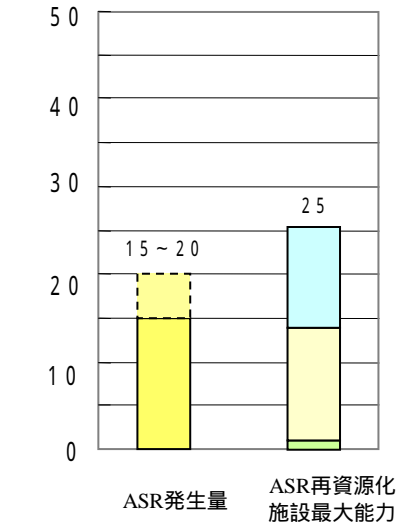
‘05年ASR発生予想量と再資源化施設最大能力



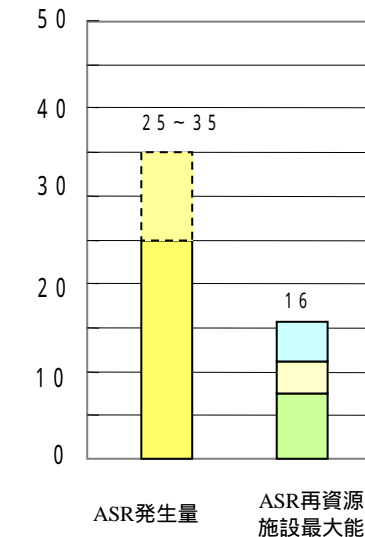
<西日本>



<東日本>



<中日本>



技術分類番号	リサイクル施設の種類の
分類1	燃料代替+原料化
分類2	乾留ガス化+熱回収+原料化
分類3	乾留ガス化+ガス利用+原料化
分類4	焼却処理+熱回収+原料化
分類5	素材選別+燃料代替

地図中の 印は破砕業者

